

日	月	火	水	木	金	土
29	30	31	1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	1

# 南日本新聞

1月4日(土)  
旧暦12月4日 先負

発行所：(郵便番号800-8603)  
鹿児島市中央区1丁目8番33号  
南日本新聞社  
電話 099-813100  
報道部 5124 | 運動部 5151  
文化部 5178 | 写真部 5155  
読者センター 5101  
NIB支機 5004  
ひろば、読者応答 5110  
販売部 5040  
広告営業部 5063  
本社経理部 5052  
編集局 5030  
編集局付 5001

医療と教育で社会に貢献する  
健康科学部  
理学療法学科  
整復医療・トレーナー学科  
看護学科  
学校法人 了徳寺大学 ☎047-382-2111

## 主な紙面

### 椋先生の功績に光を

始良市で日本画美術記念館を開く泊掬生さん(77)は、児童文学作家の椋鳩十さん(1905～87年)の直筆の書を大切に保管している。書を含めた椋さん本人から贈られた宝物だ。書を含めた椋さん関連の資料を展示して顕彰しようとして、企画展を計画した。

# 椋先生の功績に光を

始良市で日本画美術記念館を開く元教員の泊掬生さん(77)は、児童文学作家の椋鳩十さん(1905～87年)の直筆の書を大切に保管している。尊敬する椋さん本人から贈られた宝物だ。書を含めた椋さん関連の資料を展示して顕彰しようとして、企画展を計画した。

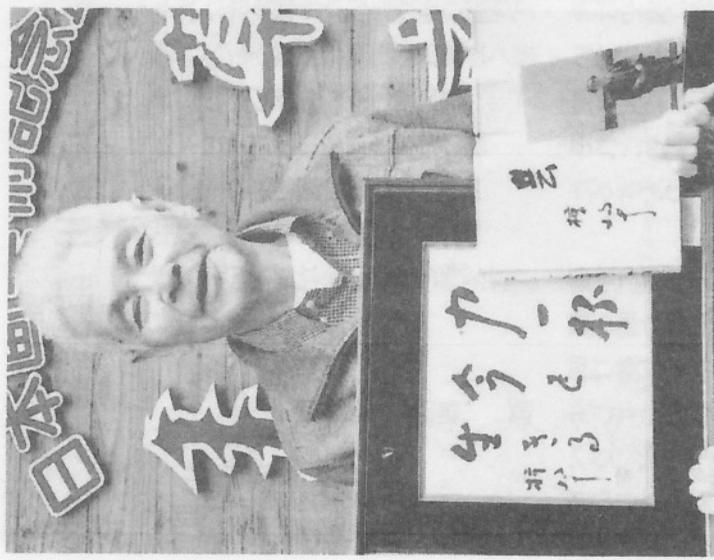
## 直筆書保管 始良の泊さん

泊さんは同市山田中に赴任した79年から3年間、最終学年を受け持った。当時の卒業記念品は苗木が主流だったが、泊さんは「生徒の心に残る品を」と、愛読書の椋文学から「孤島の野犬」を贈ることを決めた。椋さんと面識はなかったものの、生き物へ深い愛情を注ぎ命の尊さを説いた椋さんの、泊さんは師のように

## 顕彰へ企画展計画

慕っていた。電話で生徒へ贈る本へのサインをお願いすると椋さんは快諾。3年間、延べ約100人の卒業生へ「万一杯に生きる」と書かれた本が届いた。さらに教え子恵みの泊さんに椋さんも感銘し「万一杯今を生きて、天地之初に今日始(今日を無難に生きたら人生幸せ)」「朝や松の林の夕やけて」と直筆した書が泊さんあてに贈られた。椋さんとの親交の始まりとなった書を泊さんは家宝として扱い、定年後に開設した記念館ではこれまで2回、椋さんの企画展を開いた。椋さん関連の資料も多教ある。泊さんは「椋鳩十児童文学賞も廃止が決まり寂しい。企画展をして椋先生の功績にもう一度光を当てたい」と話す。

(黒田昌平)



椋鳩十さん直筆の書や書籍を大切に保管する泊掬生さん  
|| 始良市北山